

誰がやったのか？ 数年前台風プロジェクトが行われ、ルース台風資料が公開されたときのことである。序文を見るとプロジェクトに参加の人々この資料を使って将来研究や調査をやるかもしれない人々の氏名はあまらず書きつらねてあるが、龐大で複雑な資料を時間をかけてタンネンに整理し、使える形にまでまとめ上げた人々については全く言及されていないのを見て驚いたことがあった。この年のプロジェクトの大部分の仕事としてはこの資料を公開することだけで終わってしまったように思う。

4月号の「自然」を見ると「米ノ原水爆実験による諸現象」という記事があり、これを「科学」3月号の「大気中の放射能」とくらべてよんでみると、書き方が全く対蹠的なのでたいへん面白い。すなわち「自然」の論文は中央気象台管下の測候所のデータを使ったことには言及しているが、「われわれが今まで得た結果」の「われわれ」については全く個人名にふれることがなく、それならばいっそのこと著者の名前もふせて、中央気象台として発表したらよきそうな一文であるのに対し、「科学」のものは調査研究に協力した20数名の人々の個人名をあげ、最後に深い感謝の意が表されている。論文や序文の書き方にはいろいろ考え方もあろうが、ただあとで、その仕事を誰がやったかを判断する場合に、うっかりするとんでもない誤をすることになるから、歴史に興味を持たれる人にはこの点を特に注意していただきたいのである。(S Q S)

観測者は駆け廻るべきか 貧乏なわが国の気象観測も、飛行機には手が届かないがレーダーが動き始め、ロボット雨量計も3年を経て、安定な測器となってきた。新しい時代の息吹きが感じられると共に、観測者も勉強しなければとりのこされてしまう。ところで、気象測器に、ひとつ欠けているものが、使用者への思いやりであると言ったら言い過ぎであろうか。ロボットは山の雨量を自動的に報じ、隔測雨量計が各地に据えつけられながら、御本尊の測候所では、電話の照会のたびに、百葉箱への駆足をくりかえし、雨の中を雨量計室に走り、台風時の瞬間最大を聞かれては、風力塔の上に息を切らして登っている姿は、50年の昔と変りない。その間に、うっかりロボットのスイッチを入れ忘れると再測定の方法はない。相も変らぬ雨量計サイフォンの掃除、ロビンソン切点の故障、僅かの費用と思いやりで、できることが、予算がないという言葉で片付けられてはいないだろうか。最近M技官は、ロボットの受信スイッチを毎時自動的に入れる装置を作って、観測者の好評と感謝のまじった。費用は1,000円以下で、一台のロボットの総費用の1/1000にもならない。

これが、例えば電力会社などでは、気象測器をつける場合、隔測自記がたてまえである。

金があるだけではない。率を考え、せっかく人を使うならつまらない仕事にムダに使わず、もうかるように使うという思想が徹底しているからであろう。観測者のほしい測器はショーウィンドウに飾られたままである。早くガラスを破ってほしい。(Mokkos)



予報の点数 予報屋は毎日確信を持って予報を出す。と言ったら勿論嘘になる。心をちぎちぎに砕きながら、右か左かと迷いながら決を下す場合が多いのである。しかし日に依っては「うん、この予報はテキ中100%」と自信が持てる場合がある。ここで私は(いささか突飛かも知れないけれど)次のような提言を試みる。即ち「予報者は、自分が出した天気予報的中予想確率を付け加うべし」くたいて言うならば「明日は、北東の風曇後雨。ただし、この予報的中率は60%であります」——と言う具合ですがね。しかし、この的中率を付けた天気予報を一般民衆はどんな具合に利用するかと言う段になるとハテナ?と考えないでもない。気象知識が充分ある人には、これは大いに有効であろう。予報と言うものの本筋をわきまえているから予想確率を付ける苦心がよく解る。次に一般インテリもある程度は了解するに違いない。しかし衆愚といわれる大衆が卒直にこの予想確率を受け取ってくれるか、となると提案者たる小生もあまり自信がないのである。「なんだ、確率60%、その位なら予報を出さん方が良からう」となり兼ねないであろう。も一つ、確率の予想が外れた時はどうなるか。つまり的中率100%と出したものが当らなかった(と言う場合があり得る)時には、目も当てられないではニャーカ。左様、この提言は出さない方が良かったのかも知れない。(グ・サ・キ)

ちょっと人目を惹く軽評論が、K生の署名で、気象台の組合機用紙にのり、「お前が書いたんだろう」と言われて、いささかギョッとすることが、何度かあった。台内にK生は多勢いることだし、元来そんなことは気にすまいと思っているが、実際の筆者の頭文字がK生ではないのに、原稿にはわざわざK生としてあった。と聞くと、自分の頭文字まで変えて書く匿名評論家の心情が、憐れに思えてくる。同じケースで、藤原寛人さんが、天気の名書評子(K. F)と間違えられたと聞いて、ますますこの感を深くした。

当世流行の軽評論の存在意義は充分認めるが、隠れみのかくれての弱い心のウサバラシや、ちょっとしたネタミの裏返しは、火焰ビンと同じようなもので、書いている本人が悦に入っているだけで、問題が皆の共通の話題として展開していかぬのではないか。

本格的に問題を提起し、それについての議論が発展・進化していくような評論こそ望ましいのである。

だから、的をしっかりとみつめた上で、矢をつがえてほしい。

そういう私自身、以前は、いくぶん軽卒と言われても仕方のない匿名評論をしたことがあり。大きなことは言えぬのだが、これからはそれではいかぬと思うので、ここに発言する次第である。(倉島厚)